

素材が失われる時、工芸はどこに行くのか

前崎信也

(意匠学会・京都女子大学)

近年、日本の工芸が不振を続ける主な原因として、茶道・華道といった文化を学ぶ人口の減少や、自宅に床の間がないなどの生活習慣の変化が挙げられてきた。しかし、それとは別に工芸の未来を脅かす問題が近年明らかとなってきた。それは、工芸の需要や制作者の減少よりも先に素材が失われる可能性が高まっているということである。

昭和30年代から普及し始めた安価なプラスチック製品は、全国で生産されていた竹を素材とする工芸品を駆逐したといわれている。竹材への需要の減少は山林の荒廃につながり、竹林が竹藪へと姿をかえてきた。その結果、上質の竹材が年々入手困難となっているという現状がある。本発表ではこのように竹工芸と素材としての竹の問題を取り上げる予定であったが、発表の準備段階で竹工芸以上に素材の枯渇が危ぶまれる日本の磁器の存在が明らかとなった。そこで、工芸と素材という視点から、竹工芸よりも陶磁器の問題を中心に発表した。

2011年3月11日の東日本大震災は、東北の伝統工芸に多大な傷跡を残した。相馬藩の藩窯であった相馬駒焼が震災で300年以上の歴史が途絶えたことはその一例として挙げるができるだろう。しかし、震災以後、専門家も気付かない間に、全国の伝統的な磁器産地の未来に暗雲が漂っている。それは、全国の原子力発電所が稼働を停止し、碍子の注文が激減したことから始まった。碍子とは電力会社の送電・変電設備に使用される磁器製の絶縁体のこと。大きいものでは高さ10メートルにもなるものもある。その主な原料である磁土の需要が激減し、全国規模で原料となる陶石の採掘が鈍化、もしくは停止した。陶石の採掘業者の多くは、これまで電力会社が必要とする大型の碍子への原料需要があったからこそ、費用のかかる採掘を続けることができた。言い換えれば、磁器の生産地にある採掘業者であっても、花瓶や食器といった工芸品への原料の供給だけでは経営が成り立たないのである。まさか、伝統的な磁器生産の生命線のひとつに発電所があったとは誰が予測できたのだろうか。

採掘業者への注文がない状態が続いたこの数年間で陶芸家が使う国産磁土は枯渇をはじめている。例えば、京焼の磁器の主たる原料は、熊本県産の天草陶石と兵庫県産の柿谷陶石である。いずれの産地もその採掘量は最盛期とは比べられないほどに減少している。こうして、産地によっては外国産の磁土への転換も検討され始めているのである。

工芸は人々の生活に支えられてきた。それは用途のある道具としての工芸品が使われ

てきたという話だけではない。工芸の生産は、天然素材としての原料が加工され、鑑賞者や消費者に届くまでのプロセスやその評価すべてが、我々の生活と密接に関わっていたのである。本発表で取り上げた工芸素材の存続に関する問題は、これまで述べられてきた我々の生活習慣の変化よりも、電気を使うとか、便利で安価なものを求めるというような、我々の生活そのものと表裏一体であることが見えてきた。工芸素材の枯渇問題を見る限り、グローバル化する社会の中、高価な国産素材が失われていくのは不可避であるように見える。もしそうなってしまった時、果たしてそれは「日本の伝統工芸」たりえるのだろうか。